

新刊書紹介

『虫目のススメ』 - 虫と、虫をめぐる人の話 -

鈴木海花 / 著



女性のほとんどが虫嫌いである、とは世の男性の一般的な見解だろう。実は、小生もそう考えているひとりであったが、本書で、どうやら今は違うらしいと思直した。

著者の鈴木海花氏は、現代の「虫愛ずる姫君」の名にふさわしい女性フォトエッセイストで、本書は『虫目で歩けば』（ブルースインターアクションズ刊）に続く2冊目の虫の本である。また虫好きが集まる「虫カフェ@原宿シーモアグラス」の主催者でもある。

虫好きの女性について「虫愛ずる姫たち vs 台風」という一文がある。台風が近づくなか、山梨県北杜市オオムラサキセンターで開かれたイベントでのこと。そこは、お父さんときた小学生の女の子、ツノゼミが大好きな小学4年生の男の子を連れてお母さん、地元北杜高校の女子高生、虫好きな娘のために申し込んだという母娘、女子大学生のふたり連れ、虫好きのOL、さらには80歳台と思われる杖をついたおばあちゃんまで、まさに「虫愛ずる姫一代記」みたいな年齢層の広さだったという。

本書は第1部「日々虫目」編、第2部「或る図鑑をめぐる人々を訪ねて」編、第3部「虫目観光」編の3部構成で「日々虫目」編では虫目で歩いて発見した数々の虫たち、ライトト

ラップに初挑戦、アサギマダラを飼育、などの話を美しい写真を添えて展開している。たしかに、身近にいる虫が宝石に見えれば、毎日が楽しいに違いない。

一番好きな虫は？と聞かれて、カメムシと答える著者にとって、『日本原色カメムシ図鑑』全3巻（全国農村教育協会刊）にまつわる人々を取材することは、本書を作る最大の動機でもあったに違いない。第2部では最強のカメムシ採集人として名高く、『昆虫にとってコンビニとは何か？』（朝日選書）、『自然との共生というウソ』（祥伝社新書）などの著作のあるサイエンスライター高橋敬一氏を牛久に訪ねたかと思えば、図鑑に掲載されている写真の大半を撮影した高井幹夫氏、グンバイムシの研究で知られる山下泉氏、カメムシ図鑑をそもそもの成り立ちからプロデュースした生みの親川澤哲夫氏などを訪ねて高知へ飛ぶ。仕上げは弱冠37歳で第3巻の筆頭編者を務めた新進気鋭の分類学者石川忠氏を東大に取材する。長時間のインタビューを通して、困難な仕事をものともせず熱く楽しく情熱をかたむけている虫屋たちの人物像に肉薄している。

一転して第3部では、その土地でなければ発見できない面白さを虫目で発掘する様子を、女性ならではのしなやかな感性で描き出している。

最後になったが題名の「虫目」とは何か。著者によると「虫目」とは「身の回りの自然のディテールの美しさ、おもしろさが見える目」のことだそうで、「神は細部に宿る、という言葉のように、よく見ると自然は人知を超えた美しさや驚きに満ちています。」と前書で述べている。「虫」を「草」に置き換えても通用しそうである。

定価 1,995 円 (税込)、発売：全国農村教育協会
(TEL03-3839-9160, FAX03-3833-1665,
メール hon@zennokyo.co.jp)。